

氏 名 小 川 了

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大乙第30号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的
研究

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 和田 正平
教 授 秋道 智彌
教 授 端 信行
教 授 日野 舜也（京都文教大学）
助 教 授 松田 素二（京都大学）

論文内容の要旨

本研究は西アフリカ、セネガル共和国における公権力、他方において1970年代頃から顕著になったインフォーマル・セクターの様態を述べ、さらに19世紀末にセネガル独自のものとして生まれたイスラム教団ムーリッドがインフォーマル従事者を広く包摂し、そのことによって公権力に対峙する政治力と経済力をあわせもった集団になっている様相を民族学的調査によるミクロ・レベルの資料を提示しつつ、記述、分析するものである。

アフリカ諸国はそのほとんどが独立後30数年を経て、いずれも西欧型の発展を目指しながら、失敗している観がある。内発的発展とは何かが真剣に問われている状況である（はじめに）。

第1章においては、後発発展国として出発したアフリカ諸国が後発であるが故に課されたさまざまな拘束を分析すると同時に、国家の外面を整えることばかりに急で、国家の基盤である民衆の要求に答えることに失敗している現状を述べる。その状況のなかで、インフォーマル・セクターとよばれる「国家に捕捉されない」経済活動が活発になっているのだが、インフォーマル・セクターに関する多くの研究をもとに、国家と社会という観点から整理する。

第2章において、主として独立後のセネガルの歴史を点描する。初代大統領サンゴールは「アフリカ社会主義」を標榜し、ONCAD（農村開発支援公社）を設立するが、公社内部の腐敗により、この計画は失敗し、サンゴールは辞職に至る。また、この公社の失敗にはムーリッド教団も係わっている。現在のジュフ政権はカザマンス地域の分離独立運動など国内問題を抱えている。

第3章において、セネガルにおけるイスラムの浸透を記述し、特にセネガルに独自のものとして生まれたムーリッド教団が今世紀初頭以降、大きな力を得てゆく様子を述べる。当初のムーリッド教団はウォロフという農耕民族を基盤にし、厳格な規律と、階層構造を特徴とするものである。

第4章においてセネガルのインフォーマル・セクターの記述と分析にはいる。「アフリカ社会主義」の失敗と、干ばつなどの自然要因も重なり、農民の農村離脱が激しくなり、首都圏ダカールの人口は急増する。都市に集中した人々は食べてゆくためにさまざまな仕事をつくりだし、政府に捕捉されない経済活動を肥大化させてゆく。89年以降、セネガルにはインフォーマル・セクターを統括する組合も結成されており、組合員の8割の人はムーリッド教徒である。また、インフォーマル従事者を調査すると、彼らは公権力がなし得ていない職業訓練という形の教育を無料、食事つきでおこなっていること、また、さまざまな職種間でのネットワークが緊密に構成されている様子などを述べる。

第5章においては、公教育が初等、中等教育段階において多くの「落ちこぼれ」児童を生んでいることを強調しつつ、大学も機能不全に陥っていることを述べる。旧宗主国フランスの教育制度をそのままセネガルに導入していることに無理があると思われる。

第6章において、インフォーマル・セクターで働く女性について、いくつかの事例をもとに記述、分析する。アフリカの女性が生産労働においても大きな比重を占めることはすでに指摘されているが、構造調整計画のもと女性はますます困難な状況に追い込まれてい

る。彼女らはトンチンをはじめとする種々の相互扶助組織を構成しているが、これは血縁、親族縁を超えた、都市的な連帯組織であることが看取される。

第7章において、セルガルの公権力とイスラム教団、特にムーリッドとが歴史的に相互補完的な関係を形成、維持してきたことを指摘する。当初、ウォロフ農民を基盤にしていたムーリッドは現在、都市においてダヒーラという近代的性格の組織を形成し、民族の違いを乗り越えた巨大な宗教集団に変質している。ムーリッド教団はインフォーマル従事者を吸収し、海外でも経済活動をしている。巨大な経済力を背景にしたこの集団は政治的にも大きな力をもつのである。

第8章において、国家と社会という観点から、セルガルの現状を分析する。南米アマゾンでの「国家に抗する社会」、タンダニアで「国家に捕捉されず、愛情の経済を展開する」社会を検討した後、セルガルを見ると、国家のなかに「擬似国家」ともいえるものが機能していることが見えてくる。同時に、セルガルでは都市的文化として顕著なもの、音楽や絵画表現にみられる「国民文化」の芽生え、そしてイスラム教徒としての意識が錯綜している様子が見えてくる。これらいくつかのアンデンティティが相互に係わり合うなかに、国家に対峙する「市民」的な存在が兆しつつあると考える。

「おわりに」において、ムーリッド教団はインフォーマル・セクターの人々を糾合し、巨大な力をもつ集団に発展したことは理解されたが、インフォーマル・セクター従事者の多くは生産者集団とはいえない点に、国家発展にどのように寄与し得るのか、難しさが残ることを述べる。しかし、インフォーマル・セクターは簡単に国境を超えるダイナミズムを見せており、将来的に国家の枠を超えた地域連合を形作る可能性があること、そのことによって「世界システム」の辺境に位置づけられたアフリカの現状に一石を投ずる可能性がないとはいえないことを述べる。

補論1として、「アフロベシミズム」が取り沙汰されるなかにおいて、アフリカ理解のためには長期的展望の姿勢が必要なことを述べ、補論2において、ムーリッド教団の創始者アーマド・バンバがカリスマとしてたち現れる過程を、ザイールの宗教教団キンバングスの創始者シモン・キンバングと比較しつつ整理しておいた。

論文の審査結果の要旨

本論文は、独立後30数年を経過したアフリカ諸国が、現在、直面している多くの困難に対して、セネガル共和国（以下セネガルと略）を事例に、公権力に抗する内発的発展の可能性をインフォーマル・セクターとイスラム教団ムーリッドとの関係から考察したものである。

独立後、セネガルもまた、新生アフリカの1国家として「アフリカ社会主義」を標榜し、「国民国家」として政治機構を整え、政府主導の経済政策を推進していった。だが、それは、植民地時代からの問題を払拭できず、矛盾を含んだままであり、政治及び経済政策は第一章、第二章に述べられているように、民衆の期待に応えることができず失敗していった。

そのなかで、セネガル国民は自らの生活保持への様々の工夫や努力をこころみるが、とりわけ、人口増加が激しい都市部において、彼らは、インフォーマル・セクターの経済活動を活発にし、肥大化させていくのである。1970年以降、アフリカにおいてはインフォーマル・セクターに沈滞する都市住民の研究が盛んになってきた。その取り上げ方も多岐にわたるが、この論文において注目されるのは、いわゆるインフォーマル・セクターと結び付いたイスラム教団ムーリッドによる都市民組織化の過程であり、それは、国際市場の制約や圧迫、旱魃などの自然災害の影響をうけて、セネガルでは、もはや押し止められない流れになっているという状況である。また、ムーリッド教団の教義がインフォーマル・セクターの発展を促しているという指摘は、M. ウェーバ一流の枠組みであるが、それを見逃さないところにも、著者の目配りのよさがうかがわれる。

さてセネガルでは、1980年から構造調整が始まった。第六章ではその影響を受けた貧困層の女性たちが相互扶助組織（講など）を発達させていく過程が事例調査によって具体的に浮き彫りにされている。女性組織それ自体はセネガル都市に特有な現象とはいえないが、ムーリッド教団に結び付くところが特徴的である。そして、この研究の最も重要な指摘は、ダカールのインフォーマル・セクターに「ダヒーラ」という都市的なムーリッド教団の組織が成立し、経済活動のみならず政治的にも大きな力をもつ巨大な宗教集団に変質していく事を国家論の実相として言及しているところにある。すなわち、ムーリッド教団が「擬似国家」として公権力と相互補完的な機能を果たすようになり、ここに著者は国家に対峙する「市民（国民）」的な存在の兆しを看取するのである。

ともすれば、アフリカ諸国の現状に対して、独裁政治、貧困、行政官の腐敗、民族紛争等々がクローズアップされ、国家の存在に否定的評価がなされがちだが、この論文は、そうしたアフリカンペシミズムに対するアンチテーゼとなる民族誌を提示している。著者の視点は将来のアフリカ国民社会のあり方を考える場合、重要な研究の出発点であり、アフリカ民族学をさらに前進させるものである。部分的に言えば、資料の不備が指摘され、説得性に欠ける個所もあるが、アフリカ研究に斬新なる可能性を切り開いたという意味で高く評価できるものである。

以上、総合的にみて、本論文は学位を授与する水準にあるものと認定する。